



古道が紡ぐ物語



西熊野街道（十津川街道）を行く①

（その秘境の秘境たる所以）

五條から紀伊半島を縦断し十津川を経て紀伊・熊野に至る「西熊野街道」は、むしろ十津川街道としてその名を知られる。古来五條から南の奥吉野は、外界から隔絶された「秘境」とされた。その要因は四方の険しい山々と道路事情の悪さである。江戸期までは人馬がやっと通れる奥深い山道で、しかも、幾たびもの台風被害により土砂に流され、あるいは埋まり、その姿を変えてきた。

ただ、隔絶されていたのは地理的な面だけで、古来の山岳信仰や密教を通して都の世情と通じ、どこか、神仙の住む霊地ともいえる精神的な憧れがあった。まさに、「秘境」たる所以であろう。明治期になりようやく道路の近代化に着手されたものの、それでも自動車の自由な通行もおぼつかない急峻さは残り、本格的な近代化は昭和30年代の電源開発を目的とした吉野熊野総合開発により国道168号線が整備されてからで、ここで外界との経済的な結びつきが飛躍的に強まった。

今は、さらに五條新宮道路として高規格化の途上にあり往来は隔世の感があるが、2004年、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録され、精神的な憧れをさらに広めることともなった。

西熊野街道の変遷と近代化

西熊野街道（十津川街道）は、古くから五條と十津川方面を結ぶ紀伊半島の縦断ルートである。

現在は国道168号線が通うが、それは土木技術の進歩により付け替えられたもので、江戸時代までは荷車がやっと通れる程度の山道が急峻な山岳地帯を辿る難路であった。

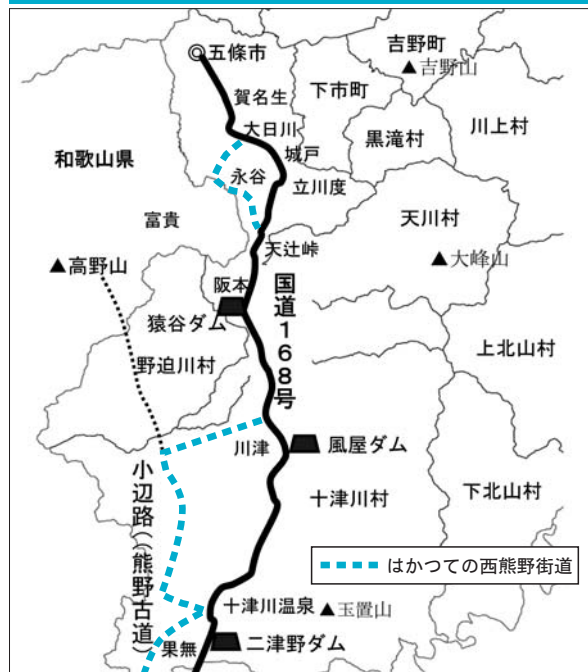
道の整備が開始されるのは、ようやく明治40年になってからで、五條市側から丹生川左岸沿いに新道が建設されていった。

五條から吉野川の支流丹生川に沿って南下すると今は市町村合併により五條市となった旧西吉野村である。梅林で有名な西吉野町賀名生は、後醍醐天皇、後村上天皇、長慶天皇の三帝が仮の皇居（行宮）を置いた場所で、賀名生皇居跡「堀家住宅」は重要文化財に指定されている。

江戸期には、街道は西吉野町賀名生を過ぎた西吉野大日川から丹生川を離れ、支流の大日川に沿って山に入り、急峻な山越えの荷車馬車がやっと通れる程度の小路が西吉野町永谷まで続いていたが、今は途中で消えている。

永谷からはいよいよ最大の難所である天辻峠に立ち向かう。丹生川（紀ノ川水系）と十津川（熊

西熊野街道周辺地図



野川水系)の分水嶺で標高約800mの難所だが、天川と富貴を尾根筋で結ぶ道が「富貴辻」で交差しており、問屋や旅館、商店が軒を並べる要衝でもあった。まさに「天」の「辻」であり、杉林に消え入りそうな山道にはその名残の道標が立つ。

抜本的な道路改修が始まったのは明治末期からで、大日川から丹生川に沿って西吉野町立川渡を経て天辻峠に至り、大正11年には天辻隧道が完成

国道 168 号線旧道から新道を見る。道路左は賀名生の里歴史民俗資料館や賀名生皇居跡のエリア。



天辻峠「富貴辻」の道標。「右五條下市 左ふつきはし本」とある。



旧天辻隧道。今は新天辻トンネルがこの下を通る。

した。この隧道は、我が国コンクリート造り道路隧道の黎明期のもので、現存するものとしては国内で2番目に古く、土木技術史的に貴重な「近代化遺産」ともいえるものである。

道路整備の進展で、以後この丹生川沿いからのルートが西熊野街道の本道となり、大正14年には、天辻隧道を越えて十津川村の北部、長殿までのバス路線も開設された。この新しい西熊野街道は、大正12年には奈良県道五條本宮線と命名され、昭和28年に国道168号線に昇格したが、山岳地帯の急峻な谷筋を蛇行するため大量輸送には難を残しており、本格改修は昭和26年の吉野熊野総合開発計画を待つこととなる。

この計画により、電源開発のため、昭和30年代から十津川流域で猿谷ダム、風屋ダム、二津野ダムが相次いで建設されたが、建設資材や木材資源の搬送のための輸送力増強、また、ダム建設にともなう水没道路の付け替えのため、トンネルや橋による直線化が進められ、昭和34年には、新天辻トンネルが建設されるなど、近代化が急速に進み現在の姿に近いものとなった。

日本史の節目節目に登場する十津川

十津川（遠津川）郷は、古くは現在の十津川村のみではなく、五條市大塔町、野迫川村を含む十津川上流地域の呼称であった。この辺りが歴史に登場するのは極めて古く、古事記・日本書紀の神武天皇東征説話に登場している。

その後も、山々により隔絶された地でありながら、日本史に残るような出来事があるたびに十津川兵が出現している。飛鳥時代には、壬申の乱でおおあまの大海人皇子（天武天皇）の挙兵に吉野勢として参戦し、その功により赦免地（無年貢地）とされ、十津川村においては、その特権は明治の地租改正までの1,200年間にも及んだ。

この間、平安後期の保元の乱（1156年）では、この地域から兵が集められたとする記述が「保元物語」「平家物語」などに見られるが、弓の名手ぞろいの、当時の最精鋭兵力であったとされる。

南北朝時代にも活躍し、後醍醐天皇系である南朝を一貫して支持し、諸天皇、皇族を擁護した。武士の時代になっても、関ヶ原の戦いでは東軍を支持し、徳川幕府から年貢赦免を受けている。

そして、時代が下り、幕末・明治維新期には、薩長などの諸藩に交じり御所警護に任じ、特に政治的野心のない十津川兵は天皇の信が篤かった。また、尊王攘夷派志士による「天誅組」の変でも出兵するなど勤王の志が強く、明治4年には郷民の長男全員が士族に列せられる特異な村であった。

そして、いつの時も、事が終わると再び郷へ帰り、赦免地として誰からも支配を受けない暮らしに戻り、まさに山中の独立国であった。

また、奥吉野地域は中央の動きにかかわるだけではなく、山岳地帯に守られた地形上、中央と対峙する反中央の勢力も受け入れてきた。

平家の落人伝説、源義経の逃避行の跡、また、中でも、幕府に対峙する後醍醐天皇とその流れをくむ南朝の勢力が活動した足跡は、西熊野街道周辺には今も数多く残る。（続く）

（山城 満）